

「紙芝居」で地域の子育てを支援 ——夢は「あそびの楽校」づくり



元松戸市職員

峯岸照恭さん (67歳)

2008年3月定年退職

【みねぎし てるやす】1947年、埼玉県三郷市出身、東洋大学第2文学部教育学科卒業。1966年松戸市役所入庁後、市議会事務局を皮切りに市長公室企画課、都市部都市整備課、経済部消費生活課・商工観光課等。都市整備本部本部長を最後に定年退職後、「財団法人松戸みどりと花の基金」理事長を2年間務めた。2010年2月からプロ紙芝居師として活躍。



若かりし頃の峯岸さん

——峯岸さんは、現在プロ紙芝居師として活動されていますが、紙芝居師になろうと思われたきっかけは何だったのですか。

2002年、市長が全職員を対象にまちおこしのアイデアを募集した際、私は「全国紙芝居コンテスト事業」を提案しました。全国から創作作品を募集してコンテストを開催し、「紙芝居のまち—松戸—」を目指そうというのがねらいでした。提案は残念ながら採用されませんでした。それがきっかけで出会ったのが後に私が師と仰ぐ大阪の紙芝居師「ヤッサン」こと安野侑志さんでした。

ヤッサンはこの道40年のベテラン紙芝居師で、子どもたちとコミュニケーションしながら進めていく独特の話法が人気を博し、業界の第一人者でした。この年、私はリサーチのため大阪を訪れヤッサンの紙芝居を見たのですが、私が子どもの頃見ていた紙芝居とはちよつと違っていたんですね。

——どんな風に違ったのですか。

私の記憶の中では紙芝居そのものより水アメや梅ジャムといった駄菓子を食べた満足感のほうが残っていたのですが、ヤッサンの紙芝居には強烈に子どもを惹きつける力があつた。それに驚嘆しました。私はヤッサンの紙芝居に魅了され、「自分も定年後は紙芝居師になって、子どもたちを喜ばせてあげたい！」と思いました。

実はその3年前の52歳の時に胃ガンを患いましてね、胃の3分の2を切除しました。政策企画室長を任せられ張り切っていた矢先

のガン宣告。原因不明の微熱が取れず1カ月の入院を余儀なくされ、やらなきゃいけない仕事はたくさんあるのにできない自分に苦しみました。療養生活をする中で、健康の大事さ、生きていることのありがたさを痛感すると共に、定年後は元気で好きなことをしようと思いに決めました。それで、道楽、それも人様に喜ばれるものを探し求めていた時期に、ヤッサンの紙芝居に巡り会ったのです。

——紙芝居のスキルは、どのようにして修得されたのですか。

ヤッサンとの出会いから数年間は、休日を利用して大阪や京都に向き師匠の技を見よう見まねで学びました。プロ認定テストの前年には師匠自ら幾度となく上京してくださり、弟子の私たちに稽古をつけてくれました。

ヤッサンの作る紙芝居には、見ている子ども達が自ら考え、答えを見つけていく作品が数多くあります。「ダメ!」「早く!」「しなさい!」を一切口にすることなく子どもの元気で生きる力を引き出していく、不思議な力があるんです。弟子の私達はこれを「安野マジック」と呼んでいます。

——峯岸さんご自身が紙芝居師としてデビューされたのは、いつですか。

2004年、河川清掃に参加した地元の子ども達に見てもらったのが最初です。『ふるさとの宝物』というヤッサンのオリジナル作品で、孫の清君が、死の間際にあるお爺

● 峯岸さんの1日のスケジュール

6:30	起床、飼育魚の餌やり、植木・草花の手入れ
7:30	朝食、新聞
9:00	紙芝居用務（直近の口演演習及び諸準備、オリジナル作品づくりなど）
12:00	昼食
13:00	フリータイム（読書、買い物、趣味の工作＝竹とんぼ・紙飛行機づくりなど、その他雑事）
17:00	飼育魚の餌やり
18:00	夕食
19:00	テレビ
21:00	メールチェック
22:00	入浴
23:00	就寝



● 1週間のスケジュール

月	植木・草花の手入れ、洗車など
火	学習指導ボランティア（地元小学校での算数教室）、太極拳教室
水	特になし
木	特になし
金	学習指導ボランティア（地元小学校での算数教室）、太極拳教室
土	紙芝居口演活動
日	紙芝居口演活動

小学校や保育所のほか各地のイベントなどでも口演される「てるさん」の紙芝居。ヤッサン仕込みの技術で子どもたちだけでなく大人たちの心もつかむ。「できれば親子三世代そろって楽しんでほしい」のだとか。現在は35話の持ちネタを100話まで増やし、年間40～50回の口演も100回まで増やしていくのが、これからの目標。



ヤッサン流紙芝居には、自転車、箱舞台、面劇、拍子木、旗指物が必需品です。それに自転車運ぶ車も欠かせません。その他に水アメ、カタヌキ、景品シールなど結構費用がかかります。プロになつて5年目ですが、まだ収支バランスが取れません。せめて経費

が、紙芝居業としての収支状況はいかがですか。

2013年に、東京周辺の師匠の弟子仲間5人で「大江戸ヤッサン一座の紙芝居有限責任事業組合」を設立し、小学校や幼稚園、高齢者施設、商店会や企業の各種イベントで口演活動を行っています。ある介護施設では『黄金バット』に涙するお年寄りもいました。子どもの頃の記憶が蘇つたのだと思います。

2008年の定年退職後、財団の理事長を2年間務められてから、2010年の春にプロ紙芝居師となられたんですね。現在はどのような活動をされているのですか？

さんが欲しがる水は田舎の湧き水であることに気づき、その水を飲ませてあげるとお爺さんは大満足でおいしそうに飲んで往生するというストーリーなんです。今でも私の大好きな演目の一つです。

紙芝居として、やりがいを感じるのほどんな時ですか。

子ども達から「面白かった！」「今度いつ来るの？」と言ってもらえた時は、うれしいですね。でも、時折、途中で帰る子どももいます。そんな時は、「よし、次回は逃がさないぞ！」と悔しさをバネに発奮するんです。私には子どもがいません。子宝には恵まれませんでしたが、年齢的に人生の折り返しを過ぎた頃から、子どもを育てるといふ役目を果たしていない自分に何処か引け目を感じていました。今にして思うと、それが紙芝居でたくさん子ども達を喜ばせてあげたいという原動力になっているのかもしれない。最近、街を歩いていると、「てるさん」と手を振ってくれる地元の小中学生が多くなり、私の次なる夢である「子どもの楽園（仮称…あそびの楽校）」づくりの意欲が掻き立てられています。

カミさんは、私が道楽で始めた紙芝居を「定年になって好きなことができればいいじゃない、是非おやりなさいよ」と快く賛同してくれました。入院中は毎日欠かさず病院に通い、世話を焼いてくれた妻でした。紙芝居でお客の多い時には水アメ作りの手伝いに来てくれます。カミさんは私の最愛の妻であり、最良の友であり、私の福の神です。夫として、人生の友として「ありがとう！」の一言に尽きます。

お話ありがとうございます。

分ぐらいは稼げるようになりたいですね。